

現代中国における対外政策の諸段階 —習近平時代を中心に—

文学研究科社会学専攻博士前期課程修了

王 嫣然

Wang Yanran

Abstract

This study clarifies the stages and fundamental changes and the characteristics of modern Chinese foreign policy. The purpose of this study is to analyze the foreign policy based on the characteristic of Xi Jinping who became the president since 2013, and to clarify whether there is a personal charm, also known as 'Xi's diplomacy', has any domestic and overseas effect on China. Among the various factors that influence and constrain foreign policy, the charisma of policy makers is the most interested in this study.

Xi Jinping president has been hypothesized that he has the charisma, but this is different from the definition of Max Weber. This report will analyze the diplomatic policy that influenced by Xi Jinping's personal charisma via the research of diplomatic means and the distinctive foreign policy. For the research in the future, I would like to further refer to the opinions of scholars in Japan and abroad. Furthermore, the features of the charisma and the foreign policy of Xi Jinping president will be further studied.

要約

本研究は現代中国対外政策の諸段階及び基本的原則の変化と特徴を明らかにするものである。また、2013年から国家主席となった習近平主席の特色ある対外政策を分析し、習近平の個人的な魅力＝「習式外交」が中国国内・外に対していかなる影響があるのかを明らかにすることが、本研究の目的である。対外政策に影響と制約を与える諸要因の中で、筆者が最も関心を持っているものは対外政策決定者のカリスマ性である。

筆者は習近平主席がカリスマ性を持っていると仮説を立てたが、マックス・ウェーバーが定義するカリスマ性とは異なると考えている。本論文では、習近平主席の外交手段、および習近平の特色ある対外政策を通じて、習近平時代の特色ある対外政策とカリスマ的支配について分析した。

今後の研究としては、より多くの日本や海外の学者の意見を参考にしたいと考える。また、習近平主席の対外政策の特徴や習近平主席のカリスマ性について更に踏み込んだ研究したいと考えている。

序章

- I. 対外政策の概念——定義、目標、影響と制約を与える諸要因
- II. 現代中国対外政策の諸段階及び基本原則と特徴
- III. 習近平の特色ある対外政策と賢人的なカリスマ的支配
 - 第1節 習近平の特色ある外交—ファーストレディ外交
 - 第2節 マックス・ウェーバーのカリスマ的支配
 - 第3節 中国人の考えるカリスマ的支配と習近平のカリスマ性
- IV. 「習式外交」と「一带一路」関連国への影響
 - 第1節 「習式外交」と「一带一路」
 - 第2節 「一带一路」とスリランカ

終章

参考文献一覧

序章

本研究は現代中国対外政策の諸段階及び基本的原則の変化と特徴を明らかにするものである。また、2013年から国家主席となった習近平主席の特色ある対外政策を分析し、習近平の個人的な魅力＝「習式外交」が中国国内・外に対していかなる影響があるのかを明らかにすることが、本研究の目的である。

本論文はまず現代国際関係における対外政策の定義や目標、対外政策に影響と制約を与える要因について分析する。対外政策に影響と制約を与える諸要因の中で、筆者が注目している要因は対外政策決定者のカリスマ性である。国家利益を実現するための手段は単一でなく、政策決定者は出身、経歴、知識、信仰、性格の特徴などの違いによって、国家利益に対する思考に影響が与えられ、国際関係に対する認識、政策選択は変化する。中国の対外政策についても、毛沢東の強烈な個性、理想主義、国際旧秩序に挑戦する精神、周恩来、鄧小平の理性と実務精神、習近平の「平民スタイル」などが、中国の対外政策に大きな影響を与えた。

また、新中国が成立してから今日に至るまで、中国は外交政策の幾つかの段階を経験した。中国民国時代の通訳官兼外交官陸徴祥は「弱国に外交なし」と語った。1945年に中国人記者が陸徴祥を取材した際、陸徴祥は将来の中国の国情について「弱国無公義、弱国無外交」と警告したことが報道された。「弱国は公正な義理や議論も持てず、他の国は弱国と外交交渉をする意思がない」という意味である。つまり、能力のない国とは、いかなる国もその国と交渉したくない、どんな国もその国を無視し、国交を拒絶する。代表的な例が中国の建国初期である。弱国に外交の権利を国際社会より認められていないということは、小さな国が他の国と外交関係を結ぶことができないということではなく、外交

現代中国における対外政策の諸段階

において重要な役割を果たせないということだと筆者は考えている。半世紀余りの間、中国の対外政策には絶えず調整と発展があったが、独立自主の平和外交政策を堅持し、中国の主権、独立、安全と発展のために、アジアと世界の平和に大きな貢献を果たしてきたと思われる。

NIE¹(2016)は「一帯一路」政策が、習近平主席個人のカリスマ性や性格を投影されている。それに、この政策が、中国とシルクロード上の国々の経済的相互関係を深めるだけでなく、外交手段の一つにも成り得るとしているを指摘した。また、NIEはマックス・ウェーバーの定義による三種類の「権威」、つまり、伝統的権威、合法的権威、カリスマ的権威を使用として中国の政治システム（特に習近平体制）を分析した。

筆者は習近平主席がカリスマ性を持っていると仮説を立てたが、マックス・ウェーバーが定義するカリスマ性とは異なると考えている。本論文は、習近平主席の外交手段、および習近平の特色ある外交政策を通じて、彼のカリスマ性について検討するものである。

事例分析として、スリランカは「一帯一路」構想に支持を表明し、最初に参加した国の一つである。スリランカの地理的位置は東南アジア、中東、アフリカと中国のシーレーンが交差する海上貿易の要所であり、中国の「21世紀海上シルクロード」戦略の重要な地位を占める。一部の西側の評論家とインドの学者は、中国がスリランカで推進している一連のプロジェクトは、中国のエネルギー戦略計画の一部であり、これによって中国はインド洋まで延伸する遠海投射能力を発展させようとしていると発言している。開発対象のスリランカの民衆側も賛否両論を表している。しかし、中国のスリランカへの援助は、「条件付きの海外援助はない」²という方針を貫いており、外国メディアが言うような侵略や覇権の特徴はない。調査によるとスリランカの多くの一般民衆は、中国プロジェクトは彼ら自身にはあまり利益を与えていないと考えていた³。

筆者はスリランカでインフラを構築することは長期的なことだと考えている。実際に、中国のスリランカへの投資はほとんどがインフラ投資である。空港、港湾、鉄道への投資は、中国にとっては経済的リスクともなるだろう。日本にとってもスリランカは海上のエネルギールートあるいは貨物貿易の要所である。近年、日本のスリランカ投資も非経済分野、つまり文化、教育、国民生活に集中している。例えば、日本はスリランカに官僚の教育支援、学校や医療などへの支援がある⁴。大量な資金を投入しなく、スリランカの政府側と民衆側から大歓迎を得て、大きな効果をもたらしたと考えている。

¹ NIEとはNational Intelligence Estimateの略称。国家情報評価報告。

² 中国外交部の発言者耿爽が2018年7月23日の記者会見会での発言。2018年7月23日、<http://www.chinaembassy.bg/chn/fyrth/t1579468.htm>、(2019年8月1日)。

³ 崔莹、「『一帯一路』給斯里兰卡給斯里兰卡帶來了什麼？」、FT中文網、2017年5月9日、<http://m.ftchinese.com/story/001072497?archive>、(2019年12月20日)。

⁴ 外務省公式ホームページで検索した「日本のODAプロジェクトスリランカ無償資金協力」結果のまとめ、2019年9月20日まで、https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/data/gaiyou/odaproject/asia/srilanka/index_01.html、(2019年12月20日)。

日本のスリランカへの投資は中国にとっても参考になるだろう。

I. 対外政策の概念

外交政策の英訳は「FOREIGN POLICY」ということだ。この単語は中国語で「対外政策」の意味で、中国語には「外交」の英訳は「DIPLOMACY」ということだ。「外交」と「対外政策」に密接なつながりがあり、違いもある。「外交」は一般的に「知恵」、あるいは「平和的方法」（例えば交渉などの手段）で国家間の関係や対外関係を処理することだ。「外交」と「対外政策」はもう一つの関係は「手段」と「目的」だと思われる。中国の『辞海』（中国の辞典）による解釈する「外交」は国家が対外政策を実施するため、国家首脳、政府首脳、外交部、外交代表機関などで行う訪問、交渉、外交文書、条約などを締結する、国際会議や国際組織活動に参加する対外活動である。「外交」は国家が対外政策を実現するための重要な手段だと言われる⁵。しかしながら、一般的に「FOREIGN POLICY」を使う時、よく中国語の「対外政策」と「外交政策」併用しされ、厳しい区別はされていない。したがって、筆者では「外交政策」ではなく、主に「対外政策」を使用する。

対外政策の根本的な出発点と帰着点は、国益の実現だと言われる。しかし、同じ国益を追求するからといって、必ずしも同じ政策を実行するわけではない。つまり、国家の対外政策に影響を及ぼす要因が「国益」ではなく、他の要因の影響と制約を受けるということだ。

1. 国内要因

(1) 国内の政治経済的要因

国内の政治的要因としては、政府機関の違い、利益集団の相互作用、公衆世論の影響などである。一般的に、国益は利益集団、地域または機関の利益を超える属性を持っているが、利益集団、地域または機関によって、国家利益の定義も異なり、異なる対外政策が主張される。例えば、当時の米国防総省や軍は、対ソ政策では実力で対抗し、制裁を加える傾向が強かったが、商務省や農務省などはビジネスに傾いていた⁶。

(2) 文化、価値観及びイデオロギー的要因

対外政策を決定する根本的な要素は現実的利益だが、文化、価値観、イデオロギーなどは現実的利益と互いに影響される。自分の民族の文化的伝統、価値観、イデオロギーを守ることは、対外政策の任務の一つである。いくつかの大国は文化とイデオロギーの優越感と使命感を形成し、自分の文化、価値観とイデオロギーを保護するだけでなく、優越性を持っていると考え、彼らの世界における主導的な地位を獲得し、あるいは強制的に輸出し、それを対外政策の使命とする。一方、外交政策の策定は人文活動の一つとして、人文環境、すなわち歴史と文化的背景、イデオロギー的の制約から逸脱することはない。ある民族の伝統的観念、信仰、価値観及び世界の認識方式によって、その国の自らの「外交文化」や「政治文化」になり、潜在的に国の外交戦略や政策が制約されると考える。例えば中

⁵ 『辞海・国際分冊』上海辞書出版社、1981年版、212頁。

⁶ 黄正柏『當代八國外交政策概要』、人民出版社、2017年2月、9頁。

現代中国における対外政策の諸段階

国の対外政策は国家主権と国益を守るためのものだが、中国の伝統文化、価値観、イデオロギーの影響も受ける。周恩来は「中国人が外交に従事するいくつかの哲学思想」について、「我々の民族の伝統から来たもので、すべてがマルクス・レーニン主義の教育ではない」⁷と述べた。2002年に江沢民が訪米した際には、「中華民族には昔から誠を本とし、和を貴とし、信を先とする優れた伝統があった。中国は国際関係を扱う際、常に価値観に従っている」⁸と述べた。2018年習近平国家主席は中央外事活動会議で重要談話を発表し、「中国の対外活動は新時代の中国の特色ある社会主義外交思想を指導として堅持し、中国の特色ある大国外交に新局面を開くべく努力し、小康社会（ややゆとりのある社会）を全面的に完成し、社会主義現代化強国の全面的な建設のために有利な環境をつくり、しかるべき貢献をする必要がある」と強調した⁹。

（3）歴史的要因

文化伝統は歴史に影響する一つの面であり、歴史の過程に一つの民族、国家の文化伝統が形成される。古い歴史的経験と記憶は文化的伝統になり、最近の歴史的経験と記憶は指導者の考え方や政策に直接影響を及ぼす¹⁰。例えば、中国は近代以来列強の侵略に遭い、屈辱を受けた。中国の国際関係における平等と平和への追求、覇権主義と強権政治への反抗、弱小国への同情は、中国の歴史的経験と関連があると思われる。

（4）対外政策決定者のカリスマ

国家利益を実現するための手段は単一でなく、異なる政策決定者は個人の出身、経歴、知識、信仰、性格の特徴などの違いによって、国家利益に対する思考に影響を与え、世界に対する認識、同じ問題を処理しても異なる政策選択がなされる¹¹。中国の対外政策において、毛沢東の強烈な個性、理想主義、国際旧秩序に挑戦する精神、周恩来、鄧小平の理性と実務精神などは、一定期間の対外政策に重要な影響を与えた。

しかし、政策決定者の個人的な要因が対外政策に影響を及ぼすのは、すべてが正しいとは限らない場合もある。政策決定者個人の要因による外交政策のマイナスの要因を減らすために、各国は国家における政策の決定権を一人に任せることを回避するための意思決定メカニズムを構築しており、意思決定のミスを減らし、誤った意思決定をしても、速やかにこれを改善することができるだろう。

2. 国際的要因

（1）国際体系と情勢

国家の対外政策は、その国を取り巻く国際環境もしくは国際体系そのものの構造変化によって大

⁷ 『周恩来外交文選』、中央文献出版社、1990年版、328頁。

⁸ 江沢民国家主席が George Bush 図書館での講演、2002年10月24日、<http://www.fmprc.gov.cn/chn/36426.html>（2019年10月1日）。

⁹ 「中国の特色ある大国外交に新局面を開く」、人民網日本語版、2018年06月26日 <http://j.people.com.cn/n3/2018/0626/c94474-9474680.html>、（2019年10月1日）。

¹⁰ 前掲 黄正柏『當代八國外交政策概要』、人民出版社、2017年2月、9頁。

¹¹ 前掲 黄正柏『當代八國外交政策概要』、人民出版社、2017年2月、14頁。

大きく影響されることがあり、前者と後者の関係を従属変数との因果関係として捉えることも可能である¹²。

(2) 地政学的環境と地理的条件

地政学的環境は国家利益と安全保障に影響し、これを制約し、その対外政策に直接的に影響・制約する。伝統的な国際政治学では、地政学 (geopolitics) が重要な位置を占めていたが、第一次世界大戦以前頃までは、国家の対外政策にとって地理的条件は決定的な影響力をもたらすものであるという見方が強かった¹³。海軍力が国力の増進及び繁栄にとって極めて重要であると考えたマハンは、イギリスがヨーロッパ大陸を真近する島国であったという地理的条件がイギリスをして19世紀の後半、世界最大の海軍国たらしめ、世界経済を支配することを可能にしたのであると述べている。20世紀になって蒸気機関車などの陸上運輸・輸送技術の発展に伴い、マッキンダーはマハんと対照的に、世界を支配するのは海洋国家 (sea power) ではなく、陸上国家 (land power) であると述べ、特に彼が中核地帯 (Heartland) と呼ぶ東欧からシベリアまでを含む地域の戦略的な重要性を説いた。彼の有名な言葉として「東ヨーロッパを制するものは世界島 (ユーラシア大陸) を制し、世界島を制するものは世界を制する」があるとした¹⁴。

現代社会において科学技術や航空技術の進歩により、地政学の重要性は当時に比べると相対的に低下してきていると言える。しかしながら、それでも国家の対外政策にとって地政学的環境や地理的条件の重要性は未だ無視できないものである。

II. 現代中国対外政策の諸段階及び基本原則と特徴

1. 建国初期の対外政策と西側陣営諸国との関係構築

中華人民共和国が成立した初頭は、新中国外交の基礎となる期間であると思われる。その時、世界は反ファシズム戦争を経て、民族解放運動、社会主義と民主運動が盛んになり、米ソも冷戦時代に入った。米国は反ソ、反共の旗を掲げ、「中間地帯」を積極的に統制し、革命運動を抑圧し、世界の覇権を図っている。このような国際環境の中で、中国はソ連をはじめとする社会主義陣営諸国と友好協力関係を樹立、発展させ、アメリカの侵略と戦争政策に反対し、被抑圧民族の反帝の闘争を支持し、アジア・アフリカ諸国との友好協力関係を展開した。数年間の努力をよって、対外関係の新しい局面を初歩的に切り開いた¹⁵。

2. 米国の侵略とソ連の圧力に対する中国の抵抗

1950年代後半から60年代にかけて、中国は新しい情勢に直面した。米国は中国を敵視、孤立させ、

¹² 佐藤英夫『現代政治学叢書 20 対外政策』、東京大学出版会、1996年7月、55頁。

¹³ 黄正柏『當代八國外交政策概要』、人民出版社、2017年2月、18頁。

¹⁴ James E. Dougherty and Robert L. Pfaltzgraff, Jr., *Contending Theories of International Relations*, New York: Harper & Row, 1981, pp. 61-66.

¹⁵ 前掲 黄正柏『當代八國外交政策概要』、人民出版社、2017年2月、18頁。

現代中国における対外政策の諸段階

干渉する政策を継続し、同時にアジア太平洋地域への侵略と干渉を拡大しようとした。ソ連は、米国との緩やかな関係を追求し、米ソ協力して、世界を支配しようとした。しかし、民族解放運動は更に発展し、新興のアジア・アフリカ諸国は団結を強化し、第三勢力を勃興させた。これらの要因の影響で、中国はソ連との距離がだんだん離れて、対外政策は50年代の「向ソ一辺倒（向蘇一辺倒）」から、「米国にも対抗し、ソ連にも対抗する」までに発展してきた。このような政策は中国の自主独立を守る一方で、国内では「極左的」な傾向が形成され、対外政策にも消極的な影響を与えていた。

3. 国際統一戦線を広く結びとソ連の覇権主義への反対

国際情勢は20世紀60年代末から70年代初めになると世界の構造は、新しい特徴を示すようになった。ソ連の軍事力は増大し、覇権主義も新しい段階に入った。ソ連の武装勢力がチェコスロバキアに侵攻し、中ソは国境での武力衝突も厳しくなり、ソ連が中国の核兵器開発基地を攻撃しようとしているなど、ソ連の脅威に対する中国側の懸念が高まった。一方、ベトナム戦争で苦境に立たされた米国は、対中関係を改善して、対外戦略を調整する可能性を見せていた。アジア・アフリカ諸国は団結を強化し、帝国主義、植民主義、覇権主義に反対する新たな高まりを見せていた。このような情勢の下で、中国の政策指導部はこのような変化を有利な契機を考え、対外政策に重大な調整を行った。中国は米ソと対峙する局面から脱却し、アメリカなど西側諸国との関係を改善し、すべての力を合わせて、ソ連の脅威に対処するという戦略的な考えを形成した。中国の対外政策も新しい段階に入り、新たな局面を切り開いた。

4. 改革開放のために対外関係の新しい局面を切り開く

1980年代に入って、国際情勢に新しい変化が生じた。冷戦は70年代に緩和され、また、ソ連が米国を攻撃し、再び米国がソ連を攻撃するという大きな変化を経験した。対中政策においても、アメリカ政府は依然として対中覇権政策を継続し、台湾問題では中国の内政に干渉して続けた。

中国国内では、「文化大革命」は終わり、1978年末、中国は経済建設に重点を移した。このような背景の下、中国はその経験と教訓を総括し、対外政策も調整した。

5. グローバル化に向かう新世紀の中国外交政策

1990年代初頭、ソ連崩壊とドイツ統一、二極冷戦の構造が終結した。国際関係は新しい時期に入り、多極化の傾向が更に拡大していったと言われる。経済のグローバル化が加速し、総合的な国力競争が激化したが、南北問題は依然として深刻だった。米ソグローバル・パワーの競争はソ連の崩壊による米国のアメリカ一國が唯一の超大国となり、米国は全世界で自国の政治、経済の原則と価値観を押し通そうとし、第三世界に対する干渉を続け、米国の覇権主義は更に露骨になり、中国の外交政策も新たな局面に直面していたと思われる。

半世紀余りの間、中国の対外政策には絶えず調整と発展があったが、独立、自主の平和外交政策を堅持し、中国の主権、独立、安全と発展のために、アジアと世界の平和に大きな貢献を果たした。その中でも基本的な原則といくつかの特徴を明確にした。つまり、独立自主である。覇権主義に反対し、

侵略と戦争を反対する。世界平和を擁護し、発展を促進することである。平和共存五原則を堅持することである。

III. 習近平時代の特色ある対外政策と賢人的なカリスマ的支配

1. 習近平の特色ある外交—ファーストレディ外交

国際政治において、ファーストレディの機能は以下の三つの分野に分けることができる。第一に、ファーストレディは元首に協力し、元首のイメージを充実させ、元首を顕彰する役割と家族一致した支持を得て、国家に団結して奉仕する。第二に、ファーストレディは元首と国家関係の管理に参与し、国家関係の発展を促進し、特に弱者層に関心を持って、相手国大衆の支持を集めることになる。第三に、医療、教育など社会問題において、民生分野である。中国の評論家趙可金は「この三つの面を見ると、中国国家主席の夫人彭麗媛自身がすでに高い出発点に立っているのが見えます」と述べた¹⁶。

「ファーストレディ」外交の伝統に従い、彭麗媛氏は習近平主席の外国訪問に随行し、その行程は女性、児童の公益事業と文化交流事業に集中していた。彭麗媛は習近平国家主席の夫人として訪問の際、社会各界の交流とコミュニケーションを重視し、積極的な公的外交の展開は、中国外交の新たな発展と革新であり、国際世論と社会各界の高い称賛を得て、訪問国人民との友好を増進し、国家のイメージを高めるために、予想外の積極的な影響を發揮し、中国の「ファーストレディ」外交が新たな発展段階に入ったことを示していた。

2. マックス・ウェーバーのカリスマ的支配

公共行政学の最も主要な創始者の一人として、マックス・ウェーバーは三つの政治支配と権威の形式を提唱した。つまり、伝統的支配（権威）、合法的支配（権威）、そしてカリスマ的支配（権威）である¹⁷。

マックス・ウェーバーは次のように「カリスマ」と「カリスマ的権威（支配）」を定義した。

「カリスマ」(Charisma) という表現はある個人の持つ非日常的な資質(それを現実にもっていようと、もっていると自称しているのも、あるいは、もっていると誤り考えられているのも、何でもよい)ことを意味する。

「カリスマ的権威」(charismatische Autorität) とは被支配者が特定の個人のそうした資質への信仰からして自らが進んで服従するような、そういう仕方で行われるところの人間に対する支配(外面的な性質がつかろうと、あるいは、内面的な性質がつかろうと)のことである。その正当性は呪術的信仰や啓示信仰あるいは英雄信仰にその根拠をおき、それは奇蹟とか、戦勝とか、またその他の成果、例えば、被支配者の福祉の増大、などによるカリスマ的資質の「証明」によってなされる。この証明が行わ

¹⁶ 趙可金・莫映川「『第一夫人』外交的角色與作為」、人民網、2013年4月8日、<http://theory.people.com.cn/n/2013/0408/c40531-21048496.html>、(2019年11月20日)。

¹⁷ マックス・ウェーバー『権力と支配』、講談社学術文庫、2012年、30頁。

れなくなり次第、カリスマ的権威は失われる¹⁸。

カリスマが社会の中に存在すると、それは人々がカリスマの真実性を認め、それをある種の信仰とし、献身できる最高の精神の拠り所とする。その関係自体には、いかなる外的な制約も備わっていないため、それはまったく内面的なものであり、追従者の自主的な奉仕であり、支配者一人の魅力によって団結したかなり精神的な共感のある集団であると言われる。

その資質によって、カリスマの保有者は権力の付与者であり、支配者でもある。ウェーバーによれば、純粋なカリスマリーダーには個人的英雄主義が含まれており、社会を超越した圧倒的な権威がある。

ウェーバーはカリスマ的リーダーが自身の権力の付与者であり、外的な力の証明を必要しないとす。その権力が実際の支配過程に現れている一方で、カリスマタイプのリーダーが追従者の従属性から離れると、その存在は意味をなさなくなる。このパラドックスの存在は、ちょうどカリスマの特性を説明した。特に世界が理性化し、民主化が推進し、独裁者が封建時期や戦争時代に行う特殊な政治スタイルが、現代の民主社会の建設することに適応できず、権力はすでに一人の手に掌握されることから、集団に掌握されることになった。

3. 中国人の考えるカリスマ的支配と習近平のカリスマ性

(1) 中国が定義したカリスマ的支配

中国でのカリスマ的権威の定義は、ある人の特別な、超人的な神聖性、英雄的な行為や模範的な品格に対する信仰、および個人が生み出すロールモデル的な力や命令に対する信仰に基づいていると考えられる¹⁹。彼は非凡な人格、創業の奇跡などの基礎の上で創立して、つまり領導者個人のカリスマの魅力に対する崇拜だった。現在、中国では「カリスマ性」持っている人を「魅力的なリーダー」、「個人魅力型な人」と翻訳することが多い。中国語では「偉い人」、「魅力的な領導者」などと翻訳する場合もある²⁰。

(2) 中国延安時期のカリスマ

延安時期（一般的に 1937 年 1 月に中国共産党が延安城に進駐してから 1947 年 3 月に撤退した時までと延安時期と呼ぶ）は 20 世紀の中国の歴史上、非常に重要な時期である。その抗日戦争の時代に、国民党の統治する地域、政治的腐敗は多くの人民を失望させ、そこで中国革命の揺籃-延安は、中国革命の旗（象徴）となった。中国共産党の指導層の中で、毛沢東、周恩来、朱德、賀龍、王震などの人は中国革命の旗手となり、特に毛沢東はその独特な個人の魅力をもって中国革命と中華民族の独立解放の象徴的な人物とされ、多くの人は毛沢東を「民族の巨人」と例えた。例えば『延安を追憶する』の一部は老人のインタビューで、そこから来た老人は延安に濃厚な感情を持って、この感情の核

¹⁸ マックス・ウェーバー『宗教社会学論』1972年版、みすず書房、86-87頁。

¹⁹ 王一川『中国現代カリス馬典型』、雲南人民出版社、1994年9月、5-9頁。

²⁰ 王懷明『組織行為學：理論與應用』、清華大學出版社、2014年5月。

心は毛沢東に対する崇拝だと考える²¹。このような崇拝は、「カリスマ崇拝」と解釈できるだろう。

中国には「天将降大任於斯人也」という言葉があり、具体的な意味は「天がある人に重任を任す」ことである。その中の「ある人」は、「偉い人」あるいは「特別な個人的魅力を持っている人」だと言われる。孟子は「五百年に必ず王が興る」と言った。カリスマ性をもっている人物は「知恵と勇敢を兼備し、天下の賢士を集める」という特性があるとされる。延安時代の毛沢東が有する特徴は非常に鮮やかに現れている。軍事家として、毛沢東は知恵と勇敢を兼備し、誰でも知っている。彼はずっと質素な服をして、多くの人は彼の服がぼろぼろだと描写した。彼は人に優しく、個人的な魅力で多くの文人を集めた。

国家に困難があるたびに、人々は「本当の天子」、「明君」、「よい皇帝」、「よい指導者」の現れることを期待し、毛沢東の存在は長い間に良い指導者を象徴した。毛沢東に対する人々の崇拝は、歴史のカリスマ崇拝に凝縮された。毛沢東の個人の独特な魅力、民族国家への巨大な貢献、民族独立の解放に対する人民の期待のため、毛沢東は当時、民族独立の代表者になり、未来新中国の「民族の父」とも呼ばれていた。

(3) 習近平のカリスマ支配

現在、中国語では「カリスマ性」持っている人を「魅力的なリーダー」と翻訳しているが、筆者は理解している習近平の「カリスマ性」は、海外メディアによく言われる「独裁」、「覇権」、「侵略」など、攻撃性を帯びた「カリスマ性」ではなく、中国の特色を持った独特なカリスマ性、彼は指導者の威厳と非凡な人格を持って、また更に親切で、自信を持った国家指導者だと考える。若者たちは彼を「習大大（シーダーダー）」と呼び、中国の人民大衆も彼に希望を抱き、彼が人民の「中国夢」を実現することを期待していると考えられる。

どの国でも汚職の存在は当たり前のことだと考えられる。2013年以來、習近平国家主席は反腐敗に対する改革決意の強さが全中国の国民から注目されている。さらに習近平の政策は全世界から注目されている。中国共産党の反腐敗運動を「ハウス・オブ・カード（看板倒れて）」と疑う声もある²²。習近平主席は、「何百人もの腐敗分子に罪を犯さなければ、13億の人民に罪を犯さなければならない」と述べた。反腐敗運動が経済発展に影響を及ぼすという指摘もある。習近平主席は「私は天が崩れることはないと思う」²⁴と述べた。2013年初め、習近平は新華社の『ネットユーザーは飲食のコーナーにおける浪費の抑制を呼びかける』の資料を見て、直ちに指示を出し、「浪費の風は必ず徹底的に

²¹ 王海平・張軍鋒『回想延安・1942』、江蘇文芸出版社、2002年、101頁。

²² 『十個真實細節帶你感受習近平的領袖魅力』（筆者訳：十個の細かいことから習近平の領導魅力を感じる）、人民網、2017-11-17、<http://cpc.people.com.cn/xuexi/GB/n1/2017/11/17/c385474-29653182.html>（2019年11月21日）。

²³ 前掲『十個真實細節帶你感受習近平的領袖魅力』（筆者訳：十個の細かいことから習近平の領導魅力を感じる）、人民網、2017-11-17

²⁴ 前掲『十個真實細節帶你感受習近平的領袖魅力』（筆者訳：十個の細かいことから習近平の領導魅力を感じる）、人民網、2017-11-17。

根絶しなければならない」と要求し、公金浪費を断固として根絶することを強調した。5年間の持続的な努力の結果、中国共産党は特権階級で不正の気風を抑えてきた。

2014年7月、中国共産党でかつて「政法の王者」と呼ばれていた周永康は突然に「重大な紀律に違反した」という理由で摘発された。国際世論は騒然となり、再びこの反腐敗の嵐を引き起こした中国共産党の指導者である習近平に関心を寄せた。習近平就任の時、ほとんどの中国人は今日の中国共産党が政治局常務委員のような最上級の官員を調査することは信じていなかった。西側諸国も、就任したばかりの習近平が、徐才厚、周永康のような幹部を制裁するとは信じていなかった。その後、郭伯雄、薄熙来、令計劃などのような元中国共産党の指導的幹部が連続して摘発された。これらの習近平の実績は中国国内に彼の反腐敗の決心と成果を示し、国民の信頼と好感を獲得しただけでなく、国外にも彼の個人的な政権の力を印象付けたと思われる。中華文明の伝承に強い使命感を持ち、習近平はつねに「私は国家主席として、中国の指導者として何をするのか、中国の五千年の文明を失わないように、あなたたちの手の中で伝承していくべきだと、先輩から言われてきた。」²⁵と述べている。

習近平の国際社会における演説の一つの特色は、中国と他国との交流の歴史を振り返り、両国の文化方面の関連性を詳しく述べ、長年にわたる両国交流の感動的な歴史に触れることにある。モスクワでも、習近平主席は孔子や老子などの中国古代の思想家がロシア国民によく知られていると指摘した。さらに、中国の革命家はロシア文化の影響を深く受けており、習近平の世代もロシア文学の古典を多数読んでいることを指摘した。インドネシアに訪問においても、彼は中国とインドネシアが2000年余り前の漢代に交流していたことを振り返り、明代の鄭和が西洋に下った。両国人民の友好交流の歴史を振り返った。習近平主席は中国と他国の歴史文化を緊密に結合し、融通して、両国の共通の文化理念と価値追求を表現した。中国の古文『韓非子・説林上』には「国之交在于民相亲」という話があり、日本語では「両国の友好は両国の民が互いに尊重し、互いに親しまなければならない」という意味である。習近平は中華民族の文化を利用し、これは文化への自信であり、外交の知恵でもあると思っている。

習近平主席の国際舞台での「平民スタイル」は日に中国外交の特色になっており、世界に中国外交の情熱を感じさせ、中国のソフト・パワーとグローバルな影響力を絶えず高めていくと思われる。

IV. 「習式外交」と「一帯一路」関連国への影響

1. 「習式外交」と「一帯一路」

「一帯一路」は「シルクロード経済ベルト」と「21世紀の海上シルクロード」の略称である。2013年9月と10月に、中国の習近平国家主席が中央アジアと東南アジアを訪問した際に、関連諸国とともに「シルクロード経済ベルト」と「21世紀の海上シルクロード」を築くことを提案した。習近平国

²⁵ CCTV ドキュメンタリー『大国外交』の第一回「大道之行」（筆者訳：広い道を歩む）、2017年10月10日、<http://tv.cctv.com/2017/08/28/VIDE79V6IvS7R9iOTqYXW6it170828.shtml> から閲覧可能。

家主席は、中国の「首席外交官」として、国際外交でも独自のスタイルを示している。外国メディアは習近平主席の外交スタイルを「習式外交」と名付けた。「習式外交」は彼の個人的な魅力を活用した外交スタイルだと思われる。

「習式外交」の中で、習近平主席はよく「天下一家」という言葉を取り上げた。国際交流においては、「国と国との交流には、永遠の友人はなく、永遠の利益しかない」²⁶という説がある。国際交流において、もちろん各国は自国の利益を考慮しなければならないが、しかし同時に他の国の利益を考慮し、自国の利益を他の国の利益と緊密に結合し、互惠・ウィンウィンの関係を実現しなければならない。そうすれば、多くの国の共感と支持を得て、友達のネットワークを拡大することができるだろう。

中国の伝統的な哲学は「己所不欲、勿施于人」という言葉を強調している。「自らの欲さないことを、人に施してはいけない」ということだ。「一帯一路」政策は、この理念によって、「人の欲さないことを、人に施してはいけない」を強調している。一字の差ではあるが、意味は大きく異なる。「自己の望まない」ことは一方で強調するのは自律であるが、一方で強調するのは自己中心的な価値の評価基準には、限界がある。「人の望まない」ことは、他人の物事に対する価値判断をより重視し、「自己中心」主義を超えた哲学である。中国で有名な哲学者趙汀陽はかつてこの問題に対して以下のように発言した。「一帯一路」政策が堅持する原則から見れば、中国は自身の戦略を他国に押しつけるのではなく、相互尊重の基礎の上に共同協力の最良の政策を選択しなければならないことを主張している²⁷。

2. 「一帯一路」とスリランカ

習近平は「一帯一路」政策に対し、各沿線国は積極的に対応してはいるが、「一帯一路」に対する疑問の声があることも明らかにする。スリランカは「一帯一路」構想に支持を表明し、最初に参加国の一つである。スリランカはインド洋の島国であり、経済は農業、鉱物、観光業が主で、工業は発達していない。さらに二十年にわたる内戦は、経済発展を著しく阻害した。スリランカの地理的位置は東南アジア、中東、アフリカと中国のシーレーンが交差する海上貿易の要所であり、中国の「21世紀海上シルクロード」戦略の重要な地位を占める。

(1) スリランカにおける中国開発プロジェクト

スリランカはインド洋の真珠と呼ばれ、海上シルクロードの重要な拠点となってきた。ハンバントタ港はスリランカの南部海岸に位置し、「一帯一路」の重要な位置であり、東アジアからヨーロッパ、中東、東アフリカなどのアジア欧州国際シーレーンへの通過点でもある。ハンバントタ港プロジェクトは、中国とスリランカが協力する重点的なプロジェクトで、全世界のコンテナ貨物の約50%、一般

²⁶ イギリス元首相ヘンリー・ジョン・テンブル パーマストンの言葉。原文：A country does not have permanent friends, only permanent interests.

²⁷ 郭延軍「這三年、『習式外交』讓中國思想影響世界」（筆者訳：この三年間、『習式外交』は中国思想を世界に影響させた）、中国日報網、2016年1月19日、http://www.chinadaily.com.cn/interface/toutiaonew/53002523/2016-01-19/cd_23143389.html（2019年10月30日）。

現代中国における対外政策の諸段階

貨物海運の三分の一、石油輸送の三分の二がここを通過する。ハンバントタ港はインド洋上の国際主要航路からわずか 10 海里的距離にあり、地理的にも重要な位置を占める。しかし、ハンバントタ港は、工業基盤が弱いなどの影響で、発展が遅れ、長期的にわたって赤字状態にあった。

2017 年に中国招商局港持ち株有限会社はスリランカ政府とハンバントタ港経営協定を締結した。スリランカ政府は、自国南部のハンバントタ市にある港の 80%の株式を中国国有会社の招商局港持ち株有限会社に売却することに合意し、港と周辺の 1 万 5000 エーカー(約 60.7 平方キロメートル)の土地を工業団地として中国の会社に賃貸し、99 年間中国がこの地域の開発に投資することに合意した。この協定は同年末に正式に発効した。2018 年、ここでの年間貨物取扱量は前年比 1.6 倍に増加し、すでに多くの企業、銀行、代理店がここで事務所や支店を開設していた。現在、ハンバントタ港の労働者の 90%が現地人だ。ハンバントタ港は 99 年間の使用権が中国の会社に貸し出されたために、外国メディアからの「中国の借金落とし穴」と非難された。そのため、一部のスリランカ現地人は、中国のハンバントタ港開発は中国の侵略であり、覇権主義であるとみなし、中国企業の現地開発にも反対していた²⁸。米国のシンクタンクにも、「中国がいかにしてハンバントタ港を購入したか」というシンクタンクを発表され、中国がハンバントタ港での開発は「中国の借款ゲーム」²⁹と呼ばれていた。そのため、当時のスリランカ総理ラニル・ウィックレメシンハ (Ranil Wickremesinghe) は「ハンバントタ港プロジェクトは、いかなる軍事目的もなく、どの国の企業もここに来て、港湾施設を利用することを歓迎する。現在、ハンバントタ港特別経済発展区域発展計画を立てている」と明らかにした。『タミル・ガーディアン紙』によると、2017 年 4 月初め、ウィックレメシンハ総理は「ハンバントタ市の港湾は中国に売却してはならず、賃貸したに過ぎない」と強調した。しかし、「この決定は仕方がないということだ。スリランカの外国債依存度が高いため、中国はスリランカの最大債権国で、このうち 80 億ドルの借金を『借地返済』で帳消しにすることができる」と述べた。スリランカのラジャパクサ元大統領も「中国企業は平等、互惠の基礎の上で、商業の原則に基づいてスリランカと協力し、開発を展開していた。これらの大型プロジェクトの融資は優遇的金利で提供される長期融資である。『債務の落とし穴』は存在しない」と表明した。ラジャパコサは「私は中国が『一帯一路』構想に関連する軍事アジェンダを持っているとも信じていない。中国の台頭は軍事力ではなく経済力によるものだ」と述べた。スリランカのサマラ・ウィクラマ発展戦略国際貿易相は「中国のスリランカへの投資は、政治的な介入や政治的な目的がなく、純粋な商業行為だ。『一帯一路』の提案はスリランカに発展の機会をもたらし、特に産業発展を促進すると信じている」と述べた。

(2) 開発中プロジェクトへのスリランカ民衆の態度

²⁸ Baichun Xiao 『『一帯一路』中的斯里蘭卡』(筆者訳:「一帯一路」政策上のスリランカ)、2017 年 5 月 25 日、<https://zhuanlan.zhihu.com/p/27103331> (2019 年 12 月 10 日)。

²⁹ 王靈柱 『「一帯一路」五年历程的回顧与分析』(筆者訳:「一帯一路」5 年間を振り返る及び分析)、社会科学文献出版社、68 頁。

「FT 中文網」³⁰の記者の現地調査によると、中国のプロジェクトは現地です否両論が行っている³¹。現地の調査員によれば、プロジェクト調査内容はスリランカ内戦後のインフラ再建だった。調査によるとスリランカの多くの一般民衆は、ここでの中国プロジェクトは彼ら自身にはあまり利益を与えていないと考えていた。例えば、2014年に中国が17億8000万人民币元を出資して、スリランカに建設した空港高速道路の運用が正式に始めると、空港からコロombo市内までの所用時間は1時間半から20分に短縮された。しかし、この道は有料で、一般民衆の収入が上がらないという前提の下では、一般市民は節約するために高速道路が使用しない場合が多い。

中国がスリランカに建設したハンバントタ国際空港は、1日に最大2便の定期便しか運航されておらず、世界で最も利用客が少ない空港とされている。2014年には、3000便でわずか2万人ぐらいの乗客がこの空港を訪れたとされている。2015年の状況はさらに深刻だった。公式データによると、同空港の利用客は2739人まで減少し、貨物輸送量は前年の68.9トンから1.2トンに低下した。

中国が建設したクリケット場の使用率も低いままであった。これらの大投資・低リターンプロジェクトは、スリランカの一部の政治家が「White Elephant プロジェクト（ホワイト エレファント）」³²と呼ばれている。現地の報道によると、スリランカ政府はハンバントタ港と周辺の大幅の土地を工業団地として中国に賃貸することは、スリランカの人々を心配させた。彼らは、スリランカの土地が「中国の植民地」になることを心配し、移住を余儀なくされた住民たちは、主に農業と漁業で暮らしており、そのために土地を失うのではないかと心配していた。駐スリランカ中国大使易先良は「このプロジェクトは約10万の雇用を増やし、現地経済を振興させることができる」と述べた。スリランカのトップレベルの政策決定者も、庶民の人々も、スリランカの「中国プロジェクト」がもたらす問題を意識していた。中国が提唱する「一帯一路」政策がもたらす経済的機会を彼らが歓迎しても、中国の投資には警戒心を持たなければならないとしていると考えている。

(3) 中国「一帯一路」政策よっての隣国スリランカへの投資を促進する

中国の周辺国の中で、なぜインドだけが「一帯一路」を支持しないのか。その原因は、中国とインドの関係によるものだと思っている。例えば、中国・パキスタン経済回廊がインド・パキスタン紛争のカシミール地方を經由し、中国・インド両国政府のダライ・ラマに対する態度の違いなど、インドは中国の「一帯一路」計画を支持できないと考えている。「一帯一路」の各プロジェクトがスリランカに投資して以来、スリランカとインドの関係は急速に改善しつつある。『インド・タイムズ』は2017年4月19日に「スリランカがインドと協力覚書締結に合意し、スリランカのコンテナターミ

³⁰ 「FT 中文網」とはイギリス「金融時報」の中国語版。

³¹ 崔莹、「『一帯一路』給斯里兰卡給斯里蘭卡帶來了什麼？」、FT 中文網、2017年5月9日、<http://m.ftchinese.com/story/001072497?archive>、(2019年12月20日)。

³² 「White Elephant」という説はタイから来たのである。白い象は希少かつ貴重な動物であり、保護されていた。タイ王室の象徴であり、屠殺されてはならないが、飼育のコストは非常に大きいため、白象を寄贈された者は苦痛に耐えられない。そのため、経済学の概念として、1項はとても貴重で、とても高い費用で維持しなければならないが、しかし巨大な経済効果を持つ資産を持ちにくい。

ナル（ECT）開発事業を、合同で運営する計画」を報じた。インドのモディ首相は2017年5月12日にスリランカを訪れ、仏教徒の祝日である「ウィッサイの日」の祝賀行事に参加する予定だった。スリランカの大統領に就任して以来、インドのモディ首相が2度目の訪問となった。これに先立ち、スリランカのラニル・ウィクラマシンハ首相は2017年4月26日、インドを訪問し、両国の協力問題を話し合った。2019年5月28日、スリランカのコロomboにおいて、コロombo南港東コンテナターミナル（ECT）の開発に関する日本、インド及びスリランカの間の協力に関する覚書が署名された。3カ国はECTの開発・運営を担うターミナル運営会社（出資比率はスリランカ51%、日本とインド共同で49%）を設立した³³。

中国はスリランカに大量の投資を行い、道路や港湾などのインフラを建設し、一部の西側の政治評論家から「石油埋蔵量が豊かな中東や欧州に向かう海上航路を建設する目的である」と言われていた。スリランカへの建設投資は中国がインド洋を支配するための戦略的拠点の建設であり、南アジアでの中国の影響力を拡大させる目的があるとされていた。このような状況は、インドや日本を含む一部の国を緊張させ、スリランカが中国の属国になることを望まず、スリランカとの協力を増やすための政策調整に乗り出したと考えられる。スリランカも中国だけに依存することを望まず、西側諸国との関係改善に積極的に応じていた。その後、インドのだけでなく、日本とスリランカの関係も改善してきた。2017年4月に、スリランカ大統領が日本を訪れた際、安倍晋三首相は「日本は4億1000万ドルの借款をスリランカに提供し、スリランカのインフラ建設に使う」と述べた。

スリランカ前大統領マイトリバラ・シリセナは最初に、中国の投資に反対し、スリランカの経済が中国に依存しすぎることには反対していた。彼は就任した当初、一連の前政府が承認した中国の投資プロジェクトを停止していたが、スリランカ政府が借金を抱え、経済発展が遅れているため、彼は政策を調整し、中国の援助を再び求めなければならなかった。さらにバランスの取れた外交政策を展開し、すべての国からの投資と協力を歓迎した。

中国の「一帯一路」政策のプロジェクトに支えられ、インド、日本などの国はスリランカでの活動を重視し、スリランカのインフラ建設に積極的に参加してきた。インドや日本とスリランカとの関係は逆に急激に成長した。筆者はスリランカでインフラを建設することで長期的なことで、逆説的ではあるが、「一帯一路」政策は中国への対抗上結果的に西側諸国スリランカに対する投資を促進したと考えている。

³³ 外務省ホームページ「スリランカにおけるコロombo南港の開発に関する日本、インド及びスリランカの間の協力に関する覚書の署名」、2019年5月28日、https://www.mofa.go.jp/mofaj/ic/cap2/page6_000327.html（2019年12月25日）。

終章

筆者は中国人の視点から中国の対外政策の意義と現代中国の外交政策の諸段階を分析し、習近平の特色ある外交政策に対して研究を続けてきた。例えばファーストレディ外交、一帯一路政策による開発しているプロジェクトがスリランカにおける影響などの例を説明した。

筆者は習近平がカリスマ性を持っていると考えている。筆者は中国人の視点に立って、現代中国語で定義された「カリスマ性」持っている人を「魅力的なリーダー」、「個人魅力型な人」「偉い人」などに翻訳した意味で、習近平のカリスマ性あるいは個人的な魅力を分析した。中国と西側諸国の政治プロセスの文化の違いによって、カリスマ性に対する理解も異なる。現在、中国社会の学者の論文、メディアなどによる習近平主席の個人的な魅力に対する中国の国内からは相対的に積極的な評価が与えられている。習近平主席に対する中国人の支持は確固としたものだ。しかし、視点を世界就中西側の研究者視点から評価すれば中国外交、特に習近平の外交姿勢については厳しい評価が与えられる³⁴。中国人の評価と西側学者の評価の違いはどこから生まれてくるのだろうか。

今後の研究としては、より多くの日本や海外の学者の意見を参考にしたいと考える。特にアメリカ側の意見と中国側の意見をより分析したいと考える。そしてマックス・ウェーバーによる国家領導者の理論分析方面は伝統的支配、合法的支配、カリスマ的支配の関連性を段階的に研究したいと考える。さらに習近平主席の対外政策の特徴や習近平主席のカリスマ性について更に踏み込んだ研究したいと考えている。多くの研究上の課題が待っているというべきであろう。

³⁴ 「習近平の成績表：毛沢東以来最強の指導者、国家分断の懸念もあるが国内世論の支持は強い」『ニュースウィーク日本版』、2019年12月24日号「首脳の成績表」。

参考文献一覧

日本語参考文献

外務省公式ホームページで検索した「日本の ODA プロジェクトスリランカ無償資金協力」結果のまとめ、2019年9月20日まで、

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/data/gaiyou/odaproject/asia/srilanka/index_01.html、
(2019年12月20日)。

外務省ホームページ「スリランカにおけるコロンボ南港の開発に関する日本、インド及びスリランカ
の間の協力に関する覚書の署名」、2019年5月28日、

https://www.mofa.go.jp/mofaj/ic/cap2/page6_000327.html (2019年12月25日)。

国分良成・添谷芳秀・高原明生・川島 真『日中関係史』有斐閣アルマ、2013年12月20日。

佐藤英夫『現代政治学叢書 20 対外政策』、東京大学出版会、1996年7月。

「習近平の成績表：毛沢東以来最強の指導者、国家分断の懸念もあるが国内世論の支持は強い」『ニ
ュースウィーク日本版』、2019年12月24日号。

柴田 聡・長谷川貴弘『中国共産党の経済政策』講談社現代新書、2012年12月20日。

高口康太「『習近平独裁』を中国人はなぜ歓迎するのか」、iRONNA ニュース

<https://ironna.jp/article/9111?p=2>。

「中国の特色ある大国外交に新局面を開く」、人民網日本語版、2018年06月26日
<http://j.people.com.cn/n3/2018/0626/c94474-9474680.html>、(2019年10月1日)。

天児慧 高木誠一郎・石井明編『中国の政治と国際関係』アジア研究、1985年31巻4号。

「日中関係、歴史を鑑として初めて『氷を砕く』ことができる-中国大学教授」、『Record China ニュ
ース』、2013年1月30日、<https://news.livedoor.com/article/detail/7362124/>、(2019年11月30
日)。

林望『習近平の中国—100年の夢と現実』岩波新書、2017年5月。

プラマ・チェラニ「スリランカで準独裁体制が復活すれば、海洋覇権を狙う中国を利するだけ」、『ニ
ュースウィーク日本版』、2019年10月30日号。

マックス・ウェーバー『宗教社会学論選』新装版、みすず書房、2019年10月10日。

マックス・ウェーバー『権力と支配』、講談社学術文庫、2012年。

毛里和子『現代中国の構造変動』東京大学出版会、2001年。

益尾知佐子・青山瑠妙・三船恵美・趙宏偉『中国外交史』、東京大学出版会、2017年9月。

宮家邦彦「習近平：カリスマなき指導者」、日経ビジネス、2016年11月9日。

「習近平の『独裁体制』は弱さの裏返し」ニュースウィーク日本版、2018年3月8日。

吉田陽介「習近平が唱える『国家統治論』は単なる独裁強化なのか」DIAMOND online、2019年11
月27日。

中国語参考文献

石念軍『『第一夫人』の外交舞台歴來廣為國家高層重視』、中国国情網、2013年3月26日、
http://www.china.com.cn/guoqing/2013-03/26/content_28362878.htm (2019年12月1日)。

王义桅『“一带一路” 机遇与挑战』、人民出版社、2017年7月。

王一川『中國現代卡里斯馬典型』、雲南人民出版社、1994年9月。

王靈桂『「一带一路」五年历程的回顾与分析』、社会科学文献出版社、2019年1月。

王海平・張軍鋒『回想延安・1942』、江蘇文芸出版社、2002年。

王懷明『組織行為學：理論與應用』、清華大學出版社、2014年5月。

王癸龍「國際政治舞台上『夫人外交』的中國視角」、『中共濟南市委黨校學報』、2013年5月。

郭延軍「這三年『習式外交』讓中國思想影響世界」、中國日報網2016年1月19日、
http://www.chinadaily.com.cn/interface/toutiaonew/53002523/2016-01-19/cd_23143389.html、
(2019年10月30日)。

姜長斌・Robert Ross『從對峙走向緩和-冷戰時期中美關係在探討』、世界知識出版社、2000年版。

黃正柏『當代八國外交政策概要』、人民出版社、2017年2月。

江澤民國家主席在喬治布希博物館的演講、2002年10月24日、
<http://www.fmprc.gov.cn/chn/36426.html> (2019年10月1日)。

崔莹、「『一带一路』給斯里蘭卡帶來了什麼？」、FT 中文網、2017年5月9日、
<http://m.ftchinese.com/story/001072497?archive>、(2019年12月20日)。

『辭海・國際分冊』上海辭書出版社、1981年版。

小约瑟夫・奈、戴维・韦尔奇『理解全球冲突与合作』理论与历史第九版、2017年5月。

『周恩来外交文選』、中央文獻出版社、1990年版。

CCTV「大国外交」第一回「大道之行」、2017年10月10日

<http://tv.cctv.com/2017/08/28/VIDE79V6IvS7R9iOTqYXW6it170828.shtml> から閲覧可能。

『十個真實細節帶你感受習近平的領袖魅力』人民網、2017-11-17、
<http://cpc.people.com.cn/xuexi/GB/n1/2017/11/17/c385474-29653182.html> (2019年11月21日)。

宋偉「外交與內政如何得以有機統一」、『國際政治科學』、2018年4期。

中國外交部發言人耿爽在2018年7月23日在例行記者會上的發言。2018年7月23日、
<http://www.chinaembassy.bg/chn/fyrth/t1579468.htm>、(2019年8月1日)。

『中国のキーワード・一带一路篇』、新世界出版社、2017年5月第1版。

趙可金・莫映川「『第一夫人』外交的角色與作為」、人民網、2013年4月8日、
<http://theory.people.com.cn/n/2013/0408/c40531-21048496.html>、(2019年11月20日)。

『鄧小平文選』第3卷、人民出版社1993年。

現代中国における対外政策の諸段階

『鄧小平外交思想學習綱要』、世界知識出版社、2000年版。

蘭嵐「20世紀50年代美國的中東政策—從歐美加計劃到艾森豪威爾主義的誕生」、『世界歷史』、2009年01期。

逢先知・金沖『毛澤東傳（1949—1976）』中央文獻出版社、2003年版（上）。

『毛澤東外交文選』中央文獻出版社、世界知識出版社、1994年版。

『毛澤東選集』第4卷、人民出版社、1991年6月第二版。

力平・馬芷菀「『周恩來年表1949—1976』上卷」、中央文獻出版社、1997年版。

李節「論20世紀60年代中加小麥貿易的重要意義」、『世界歷史』、2004年第1期。

『聯合早報』、2015年1月4日。

英語参考文献

Callahan, W. A. (2016). China's "Asia Dream" The Belt Road Initiative and the new regional order. *Asian Journal of Comparative Politics*, 1(3), 226-243.

Fallon, T. (2015). The new silk road: Xi Jinping's grand strategy for Eurasia. *American Foreign Policy Interests*, 37(3), 140-147.

Ferdinand, P. (2016). Westward ho—the China dream and 'one belt, one road': Chinese foreign policy under Xi Jinping. *International Affairs*, 92(4), 941-957.

He, K., & Feng, H. (2013). Xi Jinping's operational code beliefs and China's foreign policy. *The Chinese Journal of International Politics*, 6(3), 209-231.

James E. Dougherty and Robert L. Pfaltzgraff, Jr., *Contending Theories of International Relations*, New York: Harper & Row, 61-66

Werner J. Feld, *American Foreign Policy: Aspirations and Reality*, New York: John Wiley, 1984, pp.2-3.